名古屋女子大学　紀要　44（人・社）　383～396　1998

# 『太平記』研究史稿（1）

## ――明治期から昭和前期（戦前）まで――

大森北義

### はじめに

『太平記』は鎌倉末から南北朝にかけての十四世紀の変革と動乱の歴史過程を描いた文学作品である。その成立は「南北朝期を降らない頃」とされているが、生成の当初から人々の高い関心をあつめ、後代の文学・文芸にも広く影響を与えた(1)。ところで、『太平記』が描いたその変革と動乱の時代は古代的王権が没落し、封建的な社会関係が深く形成された転換期であったが、そうした転換期の歴史的な課題、たとえば、『太平記』自身も〝革命〟とみた公・武権力の相克や、没倫理的な下剋上の反乱状況など、『太平記』はそうした時代と情況に真正面から向かって、それを捉えようとした文学であった。だから、明治維新など、その後の日本歴史で大きな社会変革が起ころうとしたとき、その歴史認識や政治的な主張と関わって、『太平記』は変革や転換の歴史とともに想起された作品でもあった。

さて、『太平記』の研究は、十五世紀の後半に諸本の校合という形で始まるが(2)、十六世紀になると注釈書もつくられ『太平記聞書』、『太平記賢愚抄』などが成り、十七世紀に入って『太平記抄』が成った。さらに、十七世紀末には、水戸光圀が企図した修史事業（『大日本史』編纂）のための基礎的研究の一環として、流布本を含む十種に及ぶ『太平記』の伝本が集められ、本文異同の実況を明らかにするとともに、記事内容の史的考証も行なった『参考太平記』が完成し、刊行された。こうして、本文の検討と注釈研究は早くからすすめられたが、文学作品として『太平記』が考察の対象になったのは近代に入ってからである。文学的論究が芽ばえたのは明治二十年代であり、文学論的な骨格をもち始めるのは大正末年になってから。そして、文学構想や構造が本格的に論じられるようになったのは、戦後になってからであった。以下、近代以降の『太平記』の研究史を概観し、構想・構造論などを含む文学的な研究がどのように進展したかを整理してみたい。ここでは、明治期から戦前までの過程を概観する。

ところで、近代の『太平記』研究史で特徴的なことは、『太平記』は〝史書か文学か〟という論争を引き起こした〝史料批判〟としてその研究が出発したことと、〝南北朝正潤論争〟などに象徴される、近代日本の生成過程で押し出されてきた政治的で傾向的な主張や立場、あるいは時の政治的情況と、『太平記』研究が無縁でいることができなかったことである。それは、右にふれたように、変革と動乱を描いた『太平記』の文学的性格と深く関わっていたが、それら

（一）

が影響して近代の『太平記』研究の道程は決して平坦ではなかった[3]。『太平記』研究へのその影響の一端について、かつて長坂成行は次のように指摘した（「『太平記』研究の歩みと現在」・「国文学解釈と教材の研究」平3・2）。

昭和二十年までの研究はとにも角にも偏った思想の拘束から自由ではありえなかった。したがって太平記研究は戦後新たに出発したかの感があり、戦前の思潮に対する反動もあってか、ともすれば戦前の成果を顧みない傾向がないでもない。が、思潮はともかく純粋に作品研究の観点から個々の論を改めて洗い直す必要はあるだろう。

戦後の『太平記』研究が、戦前までの研究を十分に継承したかどうか、「個々の論を洗い直」してみる必要があるという指摘である。筆者も、殊に明治期以来戦前までの『太平記』の研究の成果はなお丁寧に顧みる必要があると思う。

ここでは、当面、二つの論点を設定して回顧してみたい。一つは、『太平記』の研究が史書として批判的に検討・考証することから始まった経緯と、その後の〝史書・文学論争〟の意義についてである。そして、二つは、明治期以後戦前までの文学的論究を概観して、その特徴と成果を確認することである[4]。

## 一

### 1

近代に入って、『太平記』についての発言は史学の分野から始まった。そこには以下に述べるような事情があったわけだが、具体的には〝『太平記』は史書か文学書か〟の論争として展開した。

（二）

明治政府はその存立の意義を王政復古として宣揚するにあたって、「王政」の意義を過去の歴史事実に照らして確認しようとした。明治二年に「国史編輯局」を設け、五年には太政官正院に「歴史課」を置いて「歴代ノ紀伝ヲ編撰シ」「一定ノ国史ヲ修ル」（「歴史課事務章程」『法規分類大全』）こととしたのであるが、明治八年には「歴史課」を改めて「太政官修史局」とした。その副長に就いたのが日本近代史学の創始者といわれる重野安繹[5]である。

明治十九年十二月、重野は東京学士会で「史の話」について講演し、歴史考証上史料批判が必要であることを論じて『太平記』に種々言及した（「史の話（第三回）」「東京学士会院雑誌」収載）。『太平記』の作者が「小島法師」であると記した『洞院公定日記』の記事（応安七年五月三日条）を紹介したのはその時のことである。さて、その講演で重野は、それまでの史書が「南北朝ノ事ヲ記スルニ、十ノ七八ハ太平記ヲ引用」し、多くの誤りをおかしたと述べ、「其誤謬ヲ正ントナラハ、先ツ太平記ノ書体ヲ弁セサルヘカラス」として、史料的視点からみた『太平記』の性格について次のように語った。

太平記ハ其当時ニ書シモノニテ、且ツ南朝ニ肩ヲ持チ、新田・楠木諸氏ヲ贔屓シタレハ、其説信據スヘシトテ、日本史他書ヲ閣キテ之ヲ採用セリ、是其誤謬ヲ致ス所以ナリ。（中略）太平記ハ物語ノ類ニテ、虚実相雑レリ。

つまり、『大日本史』が『太平記』を「信據」して歴史叙述を行なって「誤謬」を犯したことを過去の教訓として重視し、『太平記』の本質は「物語」であり、「虚」も「実」も含んだ作物であると認定したのである。

ところで、重野がそこで『太平記』に言及したことには相応の理

由があった。右にふれた「太政官修史局」では、明治十四年頃から『大日本編年史』の編集を始めたが、初めは「六国史」を継ぐ正史を編纂する計画であったという。ところが、その後、水戸藩が作成した『大日本史』の後を継ぐことになり、それに接続して歴史を書くにあたって、『大日本史』の記事が徹底的に検討された。そんな中で、久米邦武が新たに後醍醐天皇の即位から起筆することを提案し、それが容れられてまた方針が変更された。後年、久米はそのことにふれて、「余が見たる重野博士」(「歴史地理」明44・3)の中で次のように述べている。

後醍醐天皇、即ち太平記時代よりとなした発議者は余である。其は(中略)明治維新は建武中興を継せられたのであるに、大日本史は南北朝時代が最不完全で、今は其新材料が山の如く堆積されて居れば、之を補充するは最緊要であるから、後醍醐天皇より起したいと言たれば、同僚尽く大賛成で、直に三条総裁の嘉納となったのである。

こうして『大日本編年史』は「太平記時代より」起筆することになり、「久米邦武が起稿し、重野・久米や星野恒らが改稿補正し」て、明治二十五年にほぼ成稿した(大久保利謙「日本近代史学史」)。その歴史叙述は後醍醐天皇から起筆する方針であったから、元弘・建武から南北朝期にかけての史実の考証に努力が傾けられたのは当然であった。重野らは史料を広く検討して史実を補訂しようとしたが、その過程で『大日本史』の記述に誤りがあること、また、歴史の史料としては『太平記』に「捏造」や「虚誕談」が多いことがしだいに明らかになった。後に久米・星野らがそうした「捏造・虚誕」記事について論文を発表するが、ここにおいて修史館の史家たちは、歴史の編修にはなによりも「史実の考証」が必要であり、その研究を積み上げなければならないことを「身を以て強く感じとった」のだという(小沢栄一『近代日本史学史の研究』)。

さて、明治十九年十二月の講演で、重野は「太平記ハ物語ノ類ニテ、虚実相雑レリ」と述べたが、歴史考証において「物語」が果たす「効用」についても言及していたことは注意してよいことである。すなわち、『太平記』は「捏造多クシテ信用ニ足ラサル」ものではあるが、それなら「此類ハスヘテ廃棄シテ可ナランカ」と問うて、次のように答えた。

事実ニ於テハ信用シ難キモノ多キモ、当時ノ人情世態ヲ写スニ至テハ、物語ニ如クモノナシ、故ニ(中略)虚実相雑リ、縦令敷衍捏造タリトモ、其敷衍捏造中ニ参照ニ備ヘキ節々モアルヲヤ、(中略)其ノ大体上ニ就テ、時世ノ有様ヲ見得ル事アルハ、物語ノ効用ナリ、

つまり、『太平記』は史料としては「信用」できない部分があるが、資料としては「参照」すべきところもあり、「時世ノ有様」を感得するのに「効用」があると論じたのである。

こうした重野発言は近代に入って『太平記』を論じた早い例であったが、それが政府の修史事業に端を発し、それに従事した史学者によってなされたところに、『太平記』が史料的側面から照明があてられ、集中的に検討された理由があった。ところで、重野のこうした主張を契機に史学の分野から発言がつづいた。まず、重野への反論が出された。内藤燦聚は「太平記ハ小説家ノ作ニアラザルノ説」(「文」一巻21号、明21)を発表し、「小説家ヲ以テ太平記ノ作者ト為スハ心服スル能ハザルナリ」と述べ、『太平記』は「作リ物語リニ非ザルハ云フマデモナイ」と主張した。それに対して星野恒が「内藤燦聚君ノ太平記ハ小説家ノ作ニ非ザル説ヲ弁ズ」(「文」一巻24号、

明21）を書き、『太平記』に「誤謬」が多いことは「近頃ノ新説」ではないとして、『難太平記』の記事をあげて反論した。すると、今度は、学山外史が「読ム下太平記ハ非ル二小説一ニ説ヲ上」（「文」一巻25号、明21）、及び、「太平記ハ小説ニ非ルノ説ヲ読ム」（「文」三巻4号、明22）を発表し、重野の説以来「人ヲシテ太平記信ズルニ足ラズト云フ」状況になったと不満を表明し、『太平記』の内容は〝信ずるに足る〟ものであることを根拠をあげて縷々説明した。しかし、星野恒はさらに「史学攷究歴史編集は材料を精択すべき説」（「史学会雑誌」創刊号、明22）を書いて『太平記』への不信を表明した。また、菅政友も「太平記ノ謬妄遺漏多キ事ヲ弁ス」（「史学会雑誌」明23）において『太平記』に「謬妄」が多いことを説き、久米邦武も「太平記は史学に益なし」（「史学会雑誌」明治23～24）を著して、星野・菅と同じ立場で、『太平記』の記事内容を史料的側面から検討し、否定的評価を打ち出した。

久米の論は「史学会雑誌」に都合五号に及んで連載された大部な論考であったが、そこで、

太平記は（中略）世には史学の根基とも思ふなるべし。されど此書を史学の研究にあつれば、古冢より出たる屍の如く、盡く消失せて、中には朽骨さへなくなることの多きを如何せん。（中略）いま研究といふ正針を取りて此書を読ば、史学の用にたゝぬことは、自から瞭然なるべし。

と述べた。事実主義の立場に立って「考証史学」を標榜した久米は、『太平記』は「狂言綺語を綴」った「語りもの」であり、「謡本・浄瑠璃本同様の書」であって、「少々事実の相違あるとも、亦史学に益もあるべしと思ふ人もあらんが、是も誤りなり」。「太平記を信ずれば是非を顛倒す、かゝる書を読む故に却て智識の邪魔をなし、研究の筋を妨げらるゝなり」とまでいって、『太平記』の史料的価値を否定的に論じたのである。

（四）

2

さて、こうした論争は『太平記』を文学としてみる立場からいえば〝史書・文学論争〟といえるものであった。そして、そうした論争はその後もつづいたが(6)、明治四十年代に入ると漸くおさまり、新たな展開の芽もつくられた。たとえば、田中義成の「児島高徳」（「歴史地理」明43・1）である。田中はそこで、重野が「旧伝古説の徴證なきものを打破」して「史界の気運を開拓」し、また、久米が「太平記は史学に益なし」と論じたことによって「太平記を顧みるもの」がなくなった状況を指摘するが、一方、重野・久米らによる「抹殺」は「史学」の「革新」にとって与かって力があったことも認めた上で、

今や抹殺革新の時代は既に去りて、平心研究の時代に入り、一旦抹殺せられたりし太平記も、次第に文書記録に接近し、太平記中に杜撰捏造と思はれたる記事にして、儼として徴證を存せるもの、続々として発見せられつゝあり。

と述べ、虚誕だと思われていた『太平記』巻一「無礼講」の記事が『花園天皇宸記』の記載から史実であることが判明したことなどの例を挙げ、「児島高徳」についても「徴證」があると論じた。

ところで、重野・久米・星野・菅らが事実主義という立場にたって『太平記』を批判的に考証し、「楠木の夢、児島高徳の桜樹題詩、楠公桜井駅の訣別」などはみな「捏造」であるとしたから、重野は「抹殺博士」の異名をとったが（「余が見たる重野博士」）、そうし

た彼らの研究は、ただ「史学の革新」に貢献しただけではない。『太平記』の文学研究においても大きな意義をもっていたことは今日認めなければならないと思う。まず、『太平記』の記事について史料的観点から検討を加えて考証したことは、結局、『太平記』の歴史叙述の形質を検証することになり、それは、歴史文学としての『太平記』を研究する上では避けることのできない基礎的な検討課題であった。その課題に史学者が集中的に取り組んで『太平記』の記事内容を考証し、一定の成果をあげたことは、個々の記事内容と史実との関係のみならず、『太平記』の文学的な構想や構造を考察する上でも基礎的な研究であった。これが第一の意義である。第二は、歴史史料として『太平記』の価値が否定的に評価される中で、『太平記』の文学的価値を追求する気運が高まったことである。次にふれる芳賀矢一の論はそうした意味の典型的な成果である。そして、第三は、『太平記』に対する史料批判の方法が、文学研究の方法に影響を与え、文学研究を深化させる契機になったことである。具体的にいえば、久米らが、『太平記』の記事中に他の「古典」を〝模倣・踏襲〟したものが多いことを指摘し、〝だから『太平記』の記事は「虚誕」であり、史料としての信憑性がない〟と論じる方法を採ったが、後にふれるように、後藤丹治はその方法と成果に学び、それを継承して発展させ、『太平記』の出典・原據論として展開した。〝史書・文学論争〟は『太平記』を事実主義的立場からの批判に曝し、〝太平記は歴史にあらず〟という烙印をおしたから、その後の研究・享受に否定的影響を与えたのであったが(7)、今日からみれば、右の三点において、『太平記』の文学的研究に一定の意義もあったのである(8)。

## 二

### 1

『太平記』の史料的価値が否定的に評価される中で、文学の側からその論を受けとめ、文学としての『太平記』の意義を論じたのは芳賀矢一である。芳賀は明治二十三年十月「源平盛衰記と太平記と」(「国文学」)を発表した。それは、すでに同年の二月、菅政友が「太平記ノ謬妄遺漏多キ事ヲ弁ズ」を書き、四月から九月にかけて、久米が「太平記は史学に益なし」を書き続けていた情況下に書かれたものであった。芳賀は菅や久米らの「太平記に対する批判」を受けて、それに応えたのであった。芳賀は言う。近来『太平記』について「史料たるべき資格を失はしめんとする懐疑説」が行なわれているが、それは「文学上の資格を軽重」する論であってはならないと。そして、

これ固より明了なる事理にして、古代に在りてこそ歴史は文学と同一躰なりけれ、今は良歴史必ずしも良文学ならず、歴史としては非難すべきものも、文学としては良好なるものあり、蓋し文学と歴史とは、実に其批評の標準を異にすればなり。

つまり、歴史と文学とでは批評の基準が違うことをいい、文学には文学固有の「批評の標準」があることを主張したのである。そして、『源平盛衰記』や『太平記』は「史料たる資格を失ふ」とも「其文学上の価値は」「永遠・不死」であると述べて両書の価値を論じ、後者は前者に「其体裁文章」を「学」び、「更に成丁の域に進」んだものであるとした。すなわち、『太平記』には「文章」の「外形」とともに「内部精神」に「進歩の跡」が認められ、「勤王の精神」があると論じたのである。『太平記』の文学的価値について「勤王

の精神を含有すること多き」をもって是としたことには、文学論としてはなお説得力に欠けるものがあり、今日からみてふみこみの足りなさを感じるが、文学が自立した意義をもつと説いて『太平記』の文学的価値と評価の基準を提示しようとしたことは、『太平記』の文学研究史においては記念碑的な論であった(9)。

2

文学研究の立場から『太平記』論をさらにすすめたのは尾上八郎（『校注日本文学大系』17の「解題太平記」、大14・10）と、野村八良（「太平記概説」「国語と国文学」所収、大15・10）である。尾上は「解題太平記」において『太平記』の文学的構造を論じ、野村は「太平記概説」で『太平記』の文学論について豊かな枠組みを示し、それを具体的に論じた。発表の順序は尾上論が先であったが、野村の「概説」からみてみよう。

野村はまず『太平記』のジャンルにふれ、「群書一覧」は「雑史」に入れるが、「国文学上では軍記物語」として扱うとした。そして、『太平記』の内容・書名・作者・異本について概説し、次に「文学的評価」に及んでその特徴を次のように述べた。まず、複数作者が「漸次継ぎ足」して成ったため、記事の「編成」は「組織的に整頓」されていないこと。また、その時代は政治の実権が公武の間を移ったから「時勢に一貫した所がな」く、『太平記』の「筆づかひ」は前・中・後で「異なる」ところがあること。その他「用語」「書きぶり」なども前後で変化し、内容は「平家物語ほどの詩美を含んでゐない」。それは「乱離」や「修羅の巷」を描くために、「あぢきない時世」や、下剋上のあさましい実態が「隠さず現われ」ているためであること。また、「大義名分に無関心な者」を描く一方で、義憤・正義の声も



記し、「時には足利方に憚る所無く正義の声」を揚げているから、作者の道徳意識は麻痺していない。したがって、『太平記』は「美」よりも「善の方に多く偏」り、「道徳的意識が強烈であ」り、「文学的」には「空想や詩美に欠如を感じる」が、「道徳的意識」によって「此の欠点」を補い「成功してゐる」こと。総じて、『太平記』の文学的眼目は次のようであると述べた。

世道人心を裨補するに足りる事は、是々非々の主義で筆を執ったらしい。それで多くの忠勇義烈の事蹟を書留めた。此は此の書の最も見るべき点で、後世永く行なはれる所以もこゝに在る。

その他、「語彙・語脈」で漢文風が克ち、対句が多いこと。「和漢混和文が漢文の要素を多分に取り込んで極度に発達した一標本」であるとの評価も与え、

文教の地に落ちた当時に、太平記のやうな作が生み出されたのは一寸不思議である。作者は相当能文達筆であったろう。

と論評を付け加えた。以上が野村論の概要である。先の芳賀の論に比べてもはるかに詳しく分析がすすんだものであり、『太平記』の文学的特質を具体的に明らかにしていた。この野村論で注目されることは、成立事情に絡めて〝作者の態度が変化し〟、叙述に〝一貫性がない〟などの諸点を指摘しつつも、それを〝支離滅裂〟であるとか〝失敗作〟だというのではなく、そうした中にも文学作品として貫徹する質があると析出し、それを文学論的に位置づけたことである。たとえば、「是々非々主義」という作者の立場とそれによる歴史叙述と文学的な形象性を認め、『太平記』が「後世永く」享受された理由がそこにあったと洞察した。このように野村は『太平記』の文学的眼目を説いたのだが、文学的構想や構造に踏み込んでその

本質を解き明かすまでにはすすまなかった。

3

野村の「太平記概説」の前年、尾上八郎は『校註日本文学大系』の「解題」で『太平記』の文学的構造を考察して三部から成る構成を説いた。すなわち、

その記事はおのづから三大部に分るべきと思はれる。その第一部は、後醍醐天皇の関東御誅罰の御企から建武中興までである。第二部は、尊氏の謀叛から義貞の戦死の頃までである。第三部は、後村上天皇の御即位のあたりから細川頼之が義満を補佐するところまでである。

いわゆる〝三部構成説〟である(19)。この尾上説で看過できないことは、それが単なる三区分の論ではなく、一種の構想論として、次のような構造で提示されたことである。すなわち、尾上は第一部の内容にふれた中で次のように述べている。

作者は、楠正成が天王寺で見た聖徳太子の未来記で、本書の大綱を予告する方法を取って居る。乃ち、人王九十九(ママ)代の時一度東魚が四海を呑み、日が西天に一年ばかり隠れる。がまた西鳥が東魚を食ふ。それで、海内一に帰する。しかし、それも僅か三年であるといふので、建武中興の短期なのを示して居る。その結果獼猴の如き者が現はれて、天下を掠めるのが三十余年、また一元に帰するといふので、尊氏が天下を左右するのを述べている。

しかして、この「三十余年」目で作者が擱筆する貞治附近は、戦争が少ないため、大体太平の有様であるのを予告してゐる。この未来記は、(中略)作者の偽作でもあるまいけれども、これを利用して、全体の大綱を暗示したのは、作者の技倆の存するところと思ふ。

つまり、「作者はたゞ任意に、戦乱を年代順に」「記述した」だけでなく、「全体の綱領をかゝげ」「その順序によって叙述し」ており、「著者の用意は、甚だ周到」であると見通して『太平記』の構造的な骨格を提示し、〝聖徳太子の未来記〟がその「大綱」としての位置と役割を担っていると分析したのである。

尾上は、以上を「構造」の論であるとして、続いて「内容」について次のように論じた。まず、下剋上の風が皇室にまで及んだが、「王法は厳として存在」し、神道も仏法も破られるが作者は「信仰の念」をもって世相を描いている。それなのに『太平記』の世界で「社会秩序」が「破壊」されていくのは何故かと問い、時代と人の特性を論じつつ、次の四つの原因を指摘した。それは〝人慾〟が強い〝下剋上の時代〟であり、〝因果の軛〟を脱することが出来ずに〝魔障〟の暗躍が認められる、ということである。すなわち、

王法及び仏法は依然としてありながら、人慾、時代、因果、魔障のために天下は大乱になって治まる時がないといふのが、この大綱領である。乃ち作者はこの綱領を以て時勢の説明をしたのである。

要するに、

太平記一篇は、殆んど如上の四原因を中心として紛乱したその時代を説明したものである。それによって、一書は貫かれてゐる。矛盾衝突は諸處にあるにはあるが、それはむしろ些事である。一気持は、たしかに貫通してゐる。

以上が尾上論の概要である。『太平記』の記事構成の方法的な仕組みを解析して〝三部構成説〟を提示し、内容や表現に「矛盾衝突」

はあるものの右の「四原因を中心」に「一書は貫かれてゐ」ると分析して、『太平記』をまとまりのある一個の文学作品として把握した。『太平記』全体の記事構成を分析し、その構造の内部にまで踏み込んで文学的な形質を考察した論としては初めてのものであったといえよう。

以後、この三部構成説は広く受け入れられ、一部に批判はありながら、今日に至るまで『太平記』論を成す上での基本的な拠り所として継承されてきた。しかし、顧みて、この説の理解とその継承に問題がなかったわけではない。たとえば、この説に対して出された批判についてみてみよう。『日本古典文学大系　太平記』の「解説」（昭35・1）は次のようにいう。――この尾上説には「由来する根拠」がある。それは、『太平記評判秘伝理尽抄』が伝える作者や『太平記』の生成論と関わって、鎌倉幕府の滅亡を描く「巻十」か、あるいは巻十二の建武中興を以て「擱筆した原作」があったのではないかと想定されてきたが、それによれば『太平記』の「最初の区分」は「後醍醐天皇の北条氏討滅計画の成功」に置くことができる。であれば、「第二の区切り」は「後醍醐天皇崩御に置く」ことになり、ここに三部構成説は「安易に出来上」る。しかし、そうした想定には信のおける根拠はないのだから、尾上の「三部構成説は別に確乎たる論拠があるわけではな」いことになる。また、その三部世界の間に「断層を認めること」もできないから、「今日まで文学史などで踏襲して来た三部構成説」に「従うことは出来ない」、と。

しかし、尾上の三部構成説は三部世界間に「断層」があると主張したものではない。むしろ、全体の内容から「四原因」を抽出し、そうした物語が一つの「大綱」によって構想されているとみてその構造を説き、それとの関係で三部構成説を提示したものである。いわば、構造論と抱き合わせの構成論であった。また、尾上説は作者論や生成論との関わりで構成を論じたものではない。三部世界を構成する大綱として〝正成の未来記解釈〟があることを指摘し、全体として統一した構成意識があることと、内容的にみても四原因をもって治まる時のない時代を描こうとする「大綱領」があると指摘したのである。その意味で尾上論は、文学作品としての統一的な把握と構造的な把握を志向した三部構成論であった。その論自身に説得性があるかどうかは別にして、尾上の三部構成説は『太平記』を構造的に捉えて文学的に論じる上で新しい地平を開いたものと評価しなければならないものであった。

（八）

4

『太平記』の文学や構想に関わる論は、こうしてそれぞれに骨格をもった論として、大正末年に野村・尾上によって提示されたが、昭和期に入ってその文学的考察はさらに論点を広げて深められた。たとえば、斉藤清衛は「北野通夜物語」（「国語と国文学」昭7・8）を著した。その論は、国文学に「一貫した短所」は「思想的、哲学的要素の欠乏」であるが、南北朝時代にすでに『太平記』が作られていたことは「種々の問題を思潮史の上に提供してくれる」と述べて、巻三十五の「北野通夜物語」に注目した。そして、それは、「時代に対する批評の文学、思唯的分野を含めてゐる文芸」であると評価し、「未曾有の作品である」と論じた。

また、阪口玄章は「太平記を貫く精神」（「国語と国文学」昭9・6）で、『太平記』が『平家物語』とともに「戦記文学の双璧」であると確認し、かつて藤岡作太郎が『国文学史講話』で『太平記』を論じて次のように述べたことには問題があるとした。

平家物語には首尾一貫せる著者の理想のあるあり、（中略）全編渾然たる一全体をなせども、太平記に至りてはすなはち然らず。著者の心筆は事件の進行と共に縷々動揺し、いまだ曾て平家が示せる如き高潮に及ぶこと能はざりければなり。描写は徒らに東西に彷徨して、中心の帰着点を失ひ、支離散漫読者はまたこれが為めに前後の脈絡を忘却して巻を覆うて退屈を訴ふ。

また、阪口は、一般には、『太平記』が「詩趣に乏し」く「構想」が「劇的要素に欠け」、「思想」が「混濁」しているなど否定的に評価される一方、「儒教の影響」から「宗教的国民的観念が進歩」しているとか、「時代を如実に描写」しているなどの肯定的な評価があることにもふれた上で、『太平記』の「地位を把握」するためには「その根源的精神を」考察する必要があると説いた。すなわち、「太平記を貫く精神」は、第一に「道義観念」であり、「政治論」的には「理世安民」。第二に「義」（君臣の大義・主従の義・政道の義・士道の義・同輩骨肉の誼）を説くこと。第三に「批評的精神」に注目し、それが天下を動かす「権力」に向けられ、「強きものへの倫理的批判」となり「浮薄なる世相への痛棒」となっていると論じ、そこに『太平記』を貫く「精神」があると説いた。

阪口は、その道義的精神や批評精神が『太平記』のいかなる性格から導かれたものであるかは解明していないが、『太平記』に流れる精神を把握した論としては、芳賀矢一以来のそれまでの論を総括した、構造的な論であった。

5

さて、昭和十年代に入り、後藤丹治が研究の成果を精力的に発表し、『太平記』の文学研究は一層手堅く進められた。後藤は昭和十一年一月に刊行した『戦記物語の研究』の中で、『太平記』が後世の作品に与えた「影響関係」について考察したが、その年の四月に、「太平記と先進文学との比較研究」を課題として「太平記の一研究」（「国語と国文学」）を発表した。後藤はそこで、その課題を着想したことについて次のように述べている。かつて、久米邦武が「太平記は史学に益なし」において、『太平記』が内外の古典の「故事」を改作して描き、史書としては「誤謬」をおかしたと指摘したことについて、

久米氏の説に示された太平記の出所がすべて妥当であるとは勿論思はれないが、太平記の或る種の記事に支那及び日本の古典の模擬踏襲の存することを推察した、その着眼点は誠に面白いと思ふ。

と。つまり、『太平記』に対する久米の考証の方法に示唆されて、「太平記と先進文学との比較研究」という課題を着想したと語り、それをもって「太平記の性質を明らめようといふのが私の念願である」と述べた。具体的には、『太平記』を『平家物語』と比較し、「太平記は実に模範の一つをこの先行作品」に負っているから、両書を比較することは「太平記の成立乃至史実の研究上意味深きもの」であると述べた。そして、二年後の昭和十三年、後藤はその論を発展させて大著『太平記の研究』をまとめた。その構成は、

緒論：太平記概説
前編：太平記原據論
後編：太平記と馬琴の作品との関係
附録：近世初期小説雑考

であった。『太平記』の文学論、あるいは構造論に関しては「前編」の「太平記原據論」が特に注目される。後藤は『太平記』の「原據

出典」を考察することで、『太平記』の「文学的特色、乃至作者の教養等を窺知」ることができるとし、「太平記の成立上、その原據として重要な意義を持つ」のは『平家物語』であることをあらためて論じている。すなわち、

鎌倉時代に出たこの文学史上の一傑作は、題材・内容・表現など、多くの模範を太平記に垂れた。

と分析し、かつて岡部周三が、『太平記』が六波羅・鎌倉の滅亡合戦を「源平」という呼称で描くのは『平家物語』の影響であると論じたこと（「太平記の成立に関する考察」「史観」昭9・12）に注目し、その岡部論ふまえて、『太平記』は「その組織を平家物語に擬せんとし」たと論じた。その上で、『太平記』の評価については、「この点から見れば太平記は平家物語の模擬作に過ぎない」ようにみえるが、「能く見ると似てゐるのは外部的要素であって、両書の色合や持味は全く相違してゐる」とも述べ、

義理の弁別に於ては、太平記がまさってゐるであらう。詩的情趣に於ては太平記は遂に平家の敵ではない。すべて同一の場面を描いても、平家物語と太平記とでは、大差のあることを認めねばならぬ。

そして、『平家物語』の『太平記』への影響は「語句の模倣」を越えて作品の「組織」にまで及んでいるが、両書の「色合や持味」は全く違っているとも指摘した。後藤論は、右に掲げた目次からも窺えるように、文学論的立場からの『太平記』研究としては、それまでの研究を継承しつつも、それを飛躍的に発展させたものであった。

その意義は、第一に、「太平記は史学に益なし」など史学者の先行論文や、高木武の「平家物語と太平記との関係」、津田左右吉の『文学に現はれたる我が国民思想の研究』、亀田純一郎の伝本研究（「国語国文学講座太平記」）などの研究成果を継承しつつ、自らの見解を展開した手堅い研究であったことのほか、明治の史家達が史料に基づいて『太平記』を批判的に検討したその方法に示唆をえて、「太平記と先進文学との比較研究」という課題を発展させたことにある。つまり、後藤の研究は明治期史学の『太平記』に対する事実主義的〝抹殺史観〟による〝否定的な評価〟を文学研究の側から批判的に継承し、それを克服して得た収穫であった。また、第二に、軍記文学として『平家物語』と『太平記』を比較して論ずることの意味を一層深めたことである。両書の比較については、すでに「平家なり太平記には月もみず」（其角）といった評価が早くから行なわれ、近代に入って高木武が「平家物語と太平記との関係」（「わか竹」大4）で両書を比較したが、その高木論は「太平記が平家物語に負ふところは至大であって、両者の関係は頗る密接である」として両者の「似ている」、「影響がある」、「真似ている」箇所を指摘するにとどまっていた。後藤はそれをさらにすすめ、両書の比較研究を位置づけ（「太平記の一研究」）、『平家物語』が『太平記』に内容・表現などで「模範」を垂れ、作品の「組織」にも影響を与えたが、文学的「色合や持味」は全く違っていることなど、その質に及んで論じた（『太平記の研究』）のである。

## 6

しかし、後藤論の実際は『平家物語』が『太平記』に対して如何に「模範」を垂れたかに力点があったから、『平家物語』に対する『太平記』の従属的な影響関係も大きな強調点であった。そうした後藤論に批判的見解をもって、『太平記』に独自な文芸性があると主張したのは釜田喜三郎（「太平記に流動する文芸意識―特に平家物語

との関係を通して―」「国語と国文学」昭16・6）である。釜田は、『太平記』が『平家物語』を「模倣」したとする論拠として岡部周三が指摘し、後藤も注目した〝源平対立意識〟を取り上げ、『太平記』がそれをどう描いているかを検証し、そこから『太平記』固有の「文芸意識」を明らかにしようとした。釜田は、巻九・十で〝源平対立意識〟が強く現われていることを認めるが、『太平記』全巻にわたってはむしろ「官軍・武家の対立意識」で「覆はれ」ている事実を指摘し、『太平記』には「平家物語と全く異」る特徴があり、それは「尊皇大義の思想」や「構想」として認められるという。したがって、「太平記は文芸的価値に於て到底平家物語の敵でない」とした後藤の見解は此の点から再検討されなければならないと主張した。

釜田は次に、その〝源平対立意識〟を含めて、『平家物語』の影響と認められるものが『太平記』諸本間で変化がないかどうかを検証した。その結果、南都本・西源院本などの古態本に源平対立の表現はあるが、天正本・梵舜本・流布本などの後出本にそれが「著しく緩和されている」事実があり、それは「太平記が文芸としての意識の下に時代と共に、平家物語の模倣から脱却せんとした」ことを示すものであると考えた。しかし、他方では、「太平記が流布本に至る過程」で「平家物語の字句を模倣し、粉飾する」事実もあるとして次のように結論した。すなわち、「太平記が平家物語の模倣記事に関して一部は削除」し、「一部は修正増補」してきたことは、『太平記』が「文芸意識に揺り動かされて成立し」たことを表すもので、そこに『太平記』が独立した「一個の立派な文芸だと云える」証拠があるとした。

右は、釜田の、後藤論（『太平記』への『平家物語』の影響論）に対する批判であったが、釜田は、諸本間にみられる本文異同の実態を通して『太平記』の文芸性についての論点を紡ぎだし、それを検証する方法をとった。そうした方法はこれまでにはなかった新しいものであった。その同じ方法で釜田は、先にふれた尾上論についても批判的に検討した（「民族文芸としての太平記の成長―因果論を中心として―」・「国語と国文学」昭18・3）。すなわち、尾上が『太平記』の内容について特に「熾烈な人慾・下剋上の時勢・因果・魔障の四原因」を指摘して、「結局、人慾も魔障も皆時因であり、如何なることも因果の二字に含まれる」と説いたことを評価して、「誠に卓説で、太平記の思想不統一をいふ旧説を一挙に粉砕」した「画期的論文」であるとし、『太平記』が「因果論に終始した一大文芸作品となったことはもはや疑ひなき事実」であるとした。が、それは流布本において言い得ることで、『太平記』中の「因果」思想は後に増補されたものであり、「元来太平記の文芸上の主想として」は「なかった」ものだとして、次のように述べた。

尾上博士の論ぜられた太平記の主想、因果の理は太平記全体に亙って始めから用意されたものではなく、語り手と聞き手の共鳴共感により完成されたものと考へねばならぬ。

釜田は『太平記』には独自の文学的価値があることを一貫して説く。その論の基調は「民族文芸」としての〝展開・流動・成長〟ということであるが、その「民族文芸」とは、「民衆の創造する」文芸であり、「所謂軍記物」は「個人により創作または編纂されたものが、民衆の間にもてはやされ、琵琶法師や太平記読みによって流布され、語り手と聴き手によって自ら変改を加えられた」ものであるという（「民族文芸としての太平記の特性」・「国語と国文学」昭19・4）。諸本間の本文異同に注目し、その中で『太平記』の文学性を論ずる釜田の研究方法は、こうした『太平記』観から必然的に

（一一）

導かれたものであった。釜田論には『太平記』を広く国民的基盤の上から再評価しようとする一貫した姿勢が窺えた[11]。

## 三

上来、明治期から昭和前期（戦前）までの『太平記』の文学的論究の研究史について、二つの論点からその特徴的な相貌と成果を概観してみた。研究史論的視点からその経過と意義をふりかえり、あらためて整理すれば、第一に、すでに「太平記―研究史の展望―」（梶原正昭、『日本文学研究資料叢書　戦記文学』有精堂刊）で、

近代における『太平記』研究は、史書として扱われて来たこの書の評価に対する、再検討の動きからはじまる。

と的確に指摘されたように、近代の『太平記』研究は明治の史学者による、史料批判という形で始まった。その中で、「記録・日記・文書と太平記とは一向突合ず」、「終に太平記は語り物の痕がある」という実態が明らかにされ、歴史の史料としては「楠木の夢、児島高徳の桜樹題詩、楠公桜井駅の訣別等」はみな「不採用」とする判断が下された（久米邦武「余が見たる重野博士」）。ところで、それら史学の分野の研究は、『太平記』を歴史書としてだけでなく、文学の書として研究の対象に据える気運を醸成したという意味において、文学研究にも深く寄与するものであった。事実、『太平記』の史料的批判がすすめられる中、芳賀矢一が文学として『太平記』の価値を論じた。また、その批判的研究は『太平記』の記事内容を史料面から検証し、歴史文学としての〝史実と虚構〟問題の解明にもその後大きく寄与したのである。

第二は、大正末年に尾上・野村によって、総論的にではあったが、『太平記』の文学論が大きく前進したことである。その中で尾上は三部構成説を唱え、あわせて、『太平記』の文学的構造に及ぶ論をも提示した。

また、第三には、昭和期に入って「北野通夜物語」（斎藤）や、「太平記を貫く精神」の論（阪口）、さらに、『平家物語』との比較論（高木・後藤）など、『太平記』の文学論に関わる研究が論点を広げ、各論的にも追求された。そうした論の土台は、研究史的にみれば、大正期末の野村論にあったといえるが、各論の中では、殊に、後藤丹治が『戦記物語の研究』、『太平記の研究』を著して、『太平記』が影響を受けた作品・資料と、影響を与えた文芸について広く考察し、明治期の久米・星野らの史料批判としての研究や、大正期における高木の『平家物語』との比較・対比論をも総括しつつ、研究史の水脈を豊かに汲み上げながら、『太平記』の文学的研究を方法的にも大きく前進させたことは注目しなければならない。『太平記』の原據論と構想論を結合させて論じる糸口も、その後藤論から始まったといえるのである。

さらに、第四は、『太平記』の研究・評価の視点として釜田喜三郎が「民族文芸」という新たな視点を提示し、『太平記』の〈生成・流動・成長〉の姿を視野におさめて、それを〝国民的・民族的〟基盤の上で捉えようとした。釜田は諸本間の本文異同に注目し、そこから「民族文芸」としての本質をつかもうとする新しい研究方法を採り、「民族文芸」としての『太平記』の成長を論じた。その視点と方法は、釜田自身その後も展開させたが、梶原も指摘したように、戦後の研究にひきつがれる新しい面をもっていた。

そして、第五に、あえて付け加えて確認しておきたいが、歴史文学としての史料面からの検証と、文学的な多様な可能性を各論的に

論じたことに較べれば、一個の文学作品としての統一した構想や構造を解明する視点・論点の追求は浅かったことである。そうした意味での構造論は、尾上の三部構成説が提示されたにとどまり、先にふれたように、それも十分には継承・発展させられず、実りはまだ薄かった。昭和前期（戦前）までは、その基礎的な検討が進められた時期とみることができるだろう(12)。

**（注）**

（1）『太平記』がその生成の当初から高い関心をあつめたことは、『洞院公定日記』が応安七年（一三七四）五月三日の条で「小嶋法師」の死にふれて「是近日翫天下太平記」と記したこと、また、『難太平記』に今川了俊が「望申ても可書入」と記したことなどからも窺える。『太平記』が後代の文芸に与えた影響は、たとえば、後藤丹治氏の『戦記物語の研究』（昭11・1）などに詳しい。

（2）『実隆公記』の文明十七年（一四八五）十一月十五日条は、「今日当番、参内」「於御前太平記校合」と記し、後土御門天皇の御前で三条西実隆と滋野井教国らが「太平記」本文の校合を行ったと伝えているし、「梵舜本」巻二十八の奥書は長享三年（一四八九）に「以異本再交」したと記している。また、北条早雲校定本を親本とし、永正二年（一五〇五）の奥書をもつ「今川家本」巻一の別葉識語は、早雲が日頃『太平記』を「嗜翫」し、類本を集めて校合を行っていたことを伝えている。

（3）戦前・戦中の『太平記』研究がおかれていた情況について一つの証言をもとめれば、たとえば、むしゃこうじ・みのるは、「『太平記』と『平家物語』」（「文学」昭26）において次のように述べている。

「建武の中興」という批判をさしはさむ余地のない「聖業」に関する第一の古典としてたかめられるとともに、ぎゃくに歴史学からも文学史からも正当な批判の根拠がいっさいうばわれていってしまいました。

（4）『太平記』の文学的考察についての研究史をふりかえる場合、文学論的考察だけでなく、成立・作者・伝本についての考察もあわせ、それらを総合した研究史として追求する必要がある。殊に、生成や成立の問題は現存本『太平記』が「原太平記」からどのようにして形成されたかという問題を含んでおり、現存本『太平記』の文学的形質の論究と直接・間接に関わる重要な領域であるが、当面は、近代における戦前までの文学論的考察に焦点をあてて回顧し、生成問題の研究史は稿をあらためて考察したい。

（5）近代日本の史学がいかにして形成されたか、そこでの「修史館」の役割などについては小沢栄一『近代日本史学史の研究』などに詳しいが、池永二郎もその役割と意味を次のように簡潔に述べている（『日本中世史像の形成』）。

日本近代史学研究の基礎作業は、明治初年に設置された太政官での修史事業から出発した。修史館に拠った重野安繹・星野恒・久米邦武らは、江戸時代後期の考証学を身につけ、ヨーロッパ近代史学の実証史学をも学びとった学徒であり、その中心に立つ重野は「学問は遂に考証に帰す」ととなえるほどの徹底した実証学者だった。

（6）たとえば、鈴木成章「太平記は小説か非なるか」（「史海」、

明25）や、袖上生「鈴木氏の『太平記は小説か非なるか』を読みて」（「史海」、明三六）など、ひきつづいて出されていた。

（7）たとえば、「鈴木氏の『太平記は小説か非なるか』を読みて」の筆者「在山口　袖上生」は、久米邦武の「太平記は史学に益なし」の論を「某博士の奇論」と称え、「奇論一たび世に出てし以来、太平記の価値は頓に下落せり」と嘆いたし、後年、松本新八朗も、第二次大戦中のこととして次のように述懐した。

「永積安明氏の『太平記』をよんで」昭24）。

その当時には、まともに太平記を通読しようとする史家さえ見出すことは六ケ敷かった。有名な「太平記は史学に益なし」という久米邦武博士の言葉がそのまま信ぜられていたからである。

（8）たとえば、星野・菅・久米らは『太平記』中の史実に合致しない記述を挙げて論じたが、学山外史は「記録文書ノ事実ト符号スル」記述を博捜して、それぞれの立場から史料的考証をすすめた。それは『参考太平記』なども重視してきた考証であり、その伝統を継承したものであるといえよう。考えてみれば、重野が『太平記』の「誤謬」を指摘して史料としては「信據」がおけないと論じた面は久米らが深め、一方、「敷衍捏造中ニ参照ニ備ヘキ節々モアル」と論じて「効用」もあると論じた面は学山外史が追求したという関係であった。こうした成果は、その後『日本古典文学大系　太平記』などの注釈に発展的に継承された。

（9）芳賀論文の研究史上の位置については、梶原正昭は「太平記研究史の展望」（文学研究資料叢書『戦記文学』）で「明治期」の史学者の研究を通じて『太平記』は「史書としての意味を失う」ことになったが、「半面」それが「文学としての本来の価値を見直」すきっかけをつくったとして、芳賀矢一の論の位置づけを明確に指摘している。

（10）この尾上論は、後の論文「太平記に就いて」（「国民講座」大15・3）や、「太平記の主想」（『日本文学論纂』昭7・6）でも、ほぼ同じ内容で繰り返し説かれている。

（11）こうした釜田の一連の研究成果についても、梶原正昭は「太平記―研究史の展望―」（『日本文学研究資料叢書　戦記文学』有精堂）において次のように評価した。

戦時下という時代の影響は否定しがたいが、『太平記』研究の水準を戦後につなぐものとして留意すべきであろう。

（12）『太平記』の文学的な構想や構造、あるいは性格そのものを課題として、本格的に論が展開されるのは戦後すぐ、永積安明によってであった。永積論については戦後研究史の稿で論じたいと思うが、その場合の論点の一つは、永積が戦前までの研究を如何に継承したか、――具体的には、尾上・野村によって切り開かれ、その後豊かに広げ深められた文学的考察の論をどのように継承し、展開させたかということになる。